

方広寺鐘楼

方広寺の銅の鐘は、質素な環境の中に控えめにぶら下がっていて、一般の人が簡単にアクセスできます。一見平凡に見える風景のため、この鐘が非常であることを訪問者が気づかないことがあるかもしれません。実際、鐘は日本の近世の最も重要な歴史的建造物の1つです。16世紀の終わりに日本の政治を支配した武士の一族である豊臣家の終焉につながった政治的対立を引き起こしたと考えられています。

1589年に方広寺を設立したのは、日本の天下統一を目指した三人のうち二番目の武将である豊臣秀吉でした。完成後、方広寺の大仏殿は、日本でこれまでに建てられた最大の建造物でした。しかし残念なことに、1596年の地震により破壊され、2年後に秀吉が亡くなったため、再建には困難が伴いました。1610年、秀吉の後継者である秀頼は、大きな銅の鐘を作るため資金を集め始めました。鑄造は1614年に完了しましたが、ライバルの武将である徳川家康が異議を唱え、献堂式は突然中止されました。後から見れば、豊臣家を中傷する口実として役立つように日和見主義的に解釈した一例であるように思われます。漢字の配置を分割する方法で、家康の名前が別々にわけて刻まれていました。言い換えれば、その名前は「バラバラ」にされており、徳川家康を侮辱する行為だと捉えられた。その結果、豊臣家は滅びることにつながった。その後、約2世紀半の間、徳川家の支配が続くこととなった。

今日の方広寺にかかっている銅の鐘は1614年のオリジナルのものです。家康を激怒させたとされる碑文はまだはっきりと見えます。明治時代に建てられた美しく保存された鐘楼の天井絵は、西方浄土にあると言われている仏教の世界の神秘的な存在であるカラヴィンカの絵が豪華に描かれています。これは京都のいくつかの重要な寺院の天井にも表示されますが、誰もが簡単に絵を見れる場所はありません。